# 保育場面における発達特性の理解　～子どもの困りを理解しよう～

**岡崎達也**　(公社)京都市児童館学童連盟事務局主任厚生員統合育成担当

特性のある乳幼児の子どもたちの，気になる行動について，事例をもとに考えていきます。乳児期では，朝保護者と離れるときや遊びが終わるとき激しく泣いてなかなか泣き止めない，うろうろして遊びが見つからずおもちゃのカゴをひっくり返す，常に何かを口に入れている，呼びかけても視線が合わないなどの姿が見られます。幼児期では，自由遊びのとき，手持無沙汰で友達の気を引きたくてちょっかいをかけトラブルになる，友達の作ったものを壊したり取ったりする，話し合いの場面で，先生の話に逐一反応してずっと何かを話しているなどです。もともと子どもにはこういった姿が見られますが，発達特性からきていることも多いということを知ってください。

次に発達特性について六つの視点で話をします。一つ目は，注意・多動衝動です。シングルフォーカスと言って全体が見られず，一部分を狭く深く捉える特性があります。多動性では，動きが止まらない，落ち着きがない，また話が止まらないこともあります。衝動性は何かを見るとやりたくなって止められないという特性です。二つ目は感覚特性で，様々な感覚（視覚，聴覚，臭覚，味覚，前庭覚，触覚，固有覚）において過敏性や鈍麻性が極端に出て，生活の中で困りを感じます。三つ目は協調運動，力加減や手先の細かい動きなどがうまく調整できません。四つ目は想像性で，見通しが持ちにくい，段取りが組めない，相手の気持ちがくみとれないといったことが出てきます。五つ目は社会性で，相手の気持ちがうまく把握できず人との距離がうまく保てません。人との距離のとり方には積極奇異型（相手との距離が非常に近い），孤立型（周りのことを気にしない），受動型（一見大人しく言うことに従っているが本人は状況がつかめず不安が高い）があり，どのタイプかによって支援を考えます。最後がコミュニケーションです。思いをうまく伝えられず，話がかみ合わなかったり，ヘルプコールが出せず固まってしまいます。言葉以外の方法でも，うまくヘルプコールが出せるような支援が必要です。

子どもの気になる行動の原因に，発達特性があるかもしれないと考える必要があります。特性があっても，生活環境を整え，周りの大人や子どもの関わりが適切であれば，個性として社会に適応していけます。こじれると，メンタルヘルスの問題も出て来て医療的な介入も必要になります。発達特性があっても，そこに適応上の問題が起きなければ発達障害と考える必要のない場合もあります。乳幼児に関わる私たちが，気になる行動には必ず意味があると捉え，子どもが混乱しないように環境を整備したり，その子の特性を理解し良いところを見つけて具体的な支援を考えることが大切になってきます。特性があることで他の人にはできないことができるということもあり得るのです。